

江戸幕府評定所記録 『評定所留役其外書上留』(一)

望田朋史

史料解説 杉本史子

史料解説

江戸幕府評定所は、老中の下で、諮問に応え、また重要な刑事事件や複数の支配に亘る民事事件で当事者・関係支配者では解決できない場合の裁きを行うという重要な役割を負っていた。しかし、その関係史料の多くは今日失われている。

『評定所留役其外書上留』(東京大学史料編纂所蔵、維新史料引継本I 一〇二九)は、豎半帳で、天保一四年二月晦日〜嘉永六年四月までの主に評定所の人事に関わる書類の写が収録されている。ひとりの人物の筆にかかるものと考えられる。表紙に「組頭」と記されており、同時期評定所留役組頭を勤めていた松井助左衛門がまとめた、あるいはまとめさせたものだと考えられる。留役組頭は留役など評定所諸役の統括・人事に携わっており、各書類写には、朱書きで、老中への上申経緯や老中判断の結果、また補足説明が注記されている。本史料は、評定所に関わる責任者によりまとめられた同時代史料として貴重なものである。とくに、3の天保一四年三月二三日提出の褒章願からは、天保改革当時の評定所諸役の勤務状況や、諸役の変遷を知ることができる。(杉本史子

『仮・近世日本の政治と空間』東京大学出版会、二〇一八年刊行予定)。留役については、神保文夫「江戸の法曹・評定所留役」(『学士会会報』八四九号、二〇〇四年、六三―六八頁)が的確にまとめているように、奉行の下にあつて実質的な裁判官的職務を担い、かつ老中諮問機関としての評定所答申内容の作成を行うなど、評定所の中核を担っていた。

本史料は、阪本鈇之助氏が維新史料編纂会へ寄贈した史料のひとつである。阪本氏は、安政四年、尾張国鳴尾で出生(愛知県士族永井匡威三男)。元老院議官を勤めた阪本政均養子となり、明治一二年より、内務属、滋賀県属、控訴院書記官、滋賀県書記官、奈良県参事官、岡山県書記官、貴族院書記官兼内務書記官、東京府書記官のち、明治三五年福井県知事、同四〇年鹿児島県知事、同四四年名古屋市の要請により名古屋市長、貴族院議員などを歴任した。また、小野清『徳川制度史料』(六合館、一九二七年)の「序」を執筆している。

便宜上、各記事冒頭に、番号を付した。

(杉本史子)

從天保十四卯年二月

評定所留役

其外書上留

但相談書等併記

組頭

〔朱書〕

〔卯二月晦日〕
〔天保一四年〕

越前守殿江御直能登守上ル、同四月朔日御用人御書取御渡承付候様、

奈佐治次郎を以御渡承付いたし翌二日同人を以返上、

但、増御扶持之分者御書付出ル、

評定所番見習増御扶持方并同無足見習之儀申上候書付

書面神尾藤太郎儀、評定所番無足見習可申渡旨被仰渡

奉承知候、

卯四月朔日

御勘定奉行
〔秀來、勘定奉行〕
井上備前守

御勘定吟味方改役並

保田左七郎実子惣領
評定所番見習

保田範太郎

卯式拾五歳

高五人扶持

父本高三拾俵三人扶持

天保八酉年十月評定所番無足見習被 仰付、同十一子年見習御奉公精

出相勤候二付、御扶持方五人扶持被 下置、当卯年迄御奉公八ヶ年相

勤申候、

右範太郎儀常々御奉公実貞ニ出精相勤候旨可相成儀ニ御座候ハ、此度

御扶持五人扶持増都合拾人扶持被下置候様仕度奉願候、

2

〔朱書〕

〔一、評定所番定人数三人之内今般範太郎父保田左七郎儀、御勘定吟味

方改役並被 仰付候二付、以後範太郎儀本役同様相勤候儀二付、

御入人之儀ハ不奉願候、尤文化十二亥年三月井上作左衛門実子惣

領井上慎太郎、文政十二丑年八月石川東右衛門実子惣領石川新助

儀無足見習相勤罷在候処、右定人数三人之内明有之候節、新規拾

人扶持ツ、被下置候間、本文之通申上候儀ニ御座候、

評定所番

神尾藤右衛門実子惣領
神尾藤太郎

卯式拾九歳

右藤太郎儀御奉公可相勤相応之ものニ御座候間、可相成儀御座候ハ、評

定所番無足見習被 仰付候様仕度奉願候、

〔朱書〕

〔一、文化十四年七月右井上作左衛門実子惣領井上慎太郎儀、評定所番

無足見習被 仰付、尤其節も評定所番見習も三人之上江無足見習

忝人被 仰付、都合四人ニ相成候儀ニ御座候、且藤太郎・神尾藤

右衛門儀、評定所番被 仰付候後拾三ヶ年ニ罷成候間、本文之趣

申上候、

以上、

卯二月

跡部能登守
〔良材、勘定奉行〕
梶野土佐守
〔安清、勘定奉行〕

戸川播磨守
〔成、勘定奉行〕

岡本近江守

「卯三月廿三日

越前守殿直能登守立合上ル、

評定所留役組頭并留役共御褒美之儀申上候書付

御勘定奉行

井上備前守

井上備前守

評定所留役組頭并留役共之儀、留役者貞享二丑年支配勘定之内八人被仰付、宝永二酉年 御目見被 仰付、其節向後留役被 仰付候者別段御勘定不被 仰付留役被 仰付候旨、御書付を以被仰渡、享保十六亥年迄者御役扶持五人扶持被下候処、同年今相増拾人扶持宛被下候旨被仰渡、猶又元文三午年今式拾人扶持二被成下、其後宝曆八寅年新規式人相増、文化三寅年郡代附今過人被 仰付、其以来本役都合拾一人二相成、留役助之儀者寛延四未年本役兩人佐州江為御用被遣候跡江助兩人被 仰付御役扶持被下候処、右本役兩人佐州より帰府後相止、其後宝曆三酉年新規四人留役助被 仰付、御役金拾五兩ツ、被下、同八寅年一人相増都合五人二相成以後御扶持方拾人扶持ツ、被下候旨被仰渡、留役組頭之儀も同年新規一人被 仰付いづれも引統跡役被 仰付連綿相勤罷在候儀二御座候、然ル処右留役組頭并留役共勤方前々之様子并当時之姿をも得与見聞之上勘弁仕候処、都而評定手限公事吟味ものハ勿論、評定所一座江御下被成候評議物并御代官御預所諸伺下知・諸家仕置当或者取計振問合挨拶御差図振等取調候儀二有之、尤往古之儀者留帳も焼失いたし難相知候得共、安永度之頃今文政四、五年迄者公事吟味もの数凡壹ヶ年評定公事三、

四百口余、内寄合ものも同様位、其外評議もの三、四十口程、御代官伺ものも至而数少く道中方諸願吟味物とも凡五、六十口位之儀二有之候処、追々相増当時ハ凡壹ヶ年評定公事并内寄合物とも五百口余、御評議もの其外道中ものも百口余二及び、御代官伺之内伺之上下知いたし候もの百三三十口、其余手限二而差図いたし候品も夥敷、其外御勝手方吟味もの等以前与者莫大之相違二而前書諸問合挨拶或者御差図振等口々多端之調物数多有之、殊二古役之留役共者日々訴出候目安糺方為致道中方吟味もの并宿助郷休役免除願等之取調、又者近年打続大赦被 仰出候二付、三奉行を始遠国奉行其外諸向今進達いたし候御赦伺評議取調等も相兼、定式品々数口之御用向差湊候上、余時之儀二者候得共評定所一座懸・五手掛等吟味もの又者御仕置例類集・御触書・裁許絵図取調等も不絶有之、其時々掛申渡定式御用兼為相勤候儀二而、平生式日者曉七時立合内寄合等も未明より出勤繁々早出いたし日々私共宅江も罷出、夜分迄も吟味もの取調、帰宅之上者毎夜深更迄調物仕、更二年中昼夜之差別も無之只管打懸り居候儀二而、吟味物調物之儀者外御用筋与者訳違諸向之龜鑑、御仕置筋之儀者既二人命二も拘り候儀を為取調候事故、実々不容易勤筋二付、古今之先例等をも得与記憶不致候而者難相成候処、前書申上候通、累年都而之口数も相殖、近年者壹ヶ年分之留帳以前之三増倍二も相成、追々評議之上申上御書付を以被仰渡、又者評定所一座評議之上相定候法則并伺之上御仕置・御答申付候先例等も夥敷相殖、殊細密之取調引渡候御時節二御座候間、辺々右旧例探索等も以前与違悉手数相懸り種々了簡取調候儀二付、銘々家事等之儀者差構候儀も難相成、万事打捨昼夜御奉公一囚二心を碎罷在候間、容易之人物二而者勤遂不申、半途二而種々之病氣等相発生涯多病二相成、甚敷者一命を果候ものも間々有之候程之勤向に而、又者留役 御免相願候もの多く筆頭迄勤続候者漸々之儀勿論右之通不容易御役二付、前々今格別之御扶持方をも被下候儀、且近年都而

之御用向相續候二付而者、当分助之ものを被_レ仰付候得共、右者孰も昨今故古役之ものを伝達等二も手数相懸り、右二而御用向十分事足り候訳二者無之、当分助被_レ仰付三ヶ年程も出精不相動候而者何分一騎立候様二者難相成、併いづれも冥加之勤筋二付、組頭始一同格別精勤いたし種々勤弁練合候儀二付御用弁聊差支候儀無御座、殊前文之通公事吟味物

其外与も一体以前二見競格外之相違二候処、濟方も抄取実々前々留役其勤方与者拔群之相違二有之、且組頭之儀者右留役共勤向取調物等辺々熟覽之上存寄悉遂談判、留役惣体之勤向之統りを司り、其上御差図振・諸家問合挨拶向等引受取調、留役始改方・書物方書役等多人数之勤方者勿論身分進退向をも取扱候故、殊更不一方格別骨折候義二有之、然ル処留役共者是定式勤之御褒美も無之、当時之勤方二至候而者何分相当も仕間敷哉二付、年々拝領物之儀をも奉願度候得共、御時節柄殊新規之儀二付申上兼、然ル処去寅年之儀者就中追々被_レ仰出候御改革二付、種々入組候取調物も多端二有之、其上来相立候公事吟味物并評議ものも夥敷差湊候処、別紙訳書之通一時二相片付相殘候分者地所二拘、実々無抛品又者近来願出候口々等二而一体惣数千七百余二およひ候儀者絶而見合も無之程之儀二候処、寄合七分二厘余之濟方二有之、其余御代官御預所役人諸何等不及伺、手限二而差図いたし候一件等も数多有之、右者惣数之外二候処、是又早速相片付一体留役定人数拾壹人之内馬喰町御貸附懸壹人定式退切并五街道御取締御用兩人江州湖水縁騷立吟味御用兩人遠国罷出被_レ仰付、古役之もの追々転役等二而俄二新役多奉物も其度々割替手戻二相成候処、前書之通裁許書并御仕置例類集取調等臨時御用も相兼、又者関東筋在々取締方改革并教諭筋取調等も有之、右体一時二差湊候儀ハ稀之儀二而実々御用多未曾有之年柄二有之候処、留役助・同当分助之もの共一同格別出精相勤候故、却而平年分濟方抄取候儀二而組頭之義も右体新役多等二而万端手込壹人二而者手余候処、是又出精骨折相勤候儀

二付、此上励之ため二も御座候間、夫々相応之御褒美被下置候様仕度、依之留役組頭并留役共平日勤方之次第をも入御聴、別紙去寅年之公事吟味濟方訳書相添此段偏奉願候、

〔朱書〕

「本文御褒美之儀、留役助・同当分助之もの共者孰れも昨今二而御用向いまた事馴不申候二付、古役之もの伝達等甚手込候儀二有之、尤去寅年之儀者本文二も申上候通、転役其外遠国御用等二而定式勤之もの格別御人少、其上一時二新役多二相成、当時本役以上之もの漸五人有之ては無之、其内兩人者去寅十二月本役被_レ仰付候儀二而、猶今壹人明有之候得共、いまた繰上之儀も不申上程之儀二而、右体之儀者別役議之儀二御座候間、以後之見合二者仕間敷候間、何卒本役以上之もの江者右出精之規模相立候様格別御品宜御褒美被下置度、偏奉願候儀二御座候、」

以上、

卯二月

跡部能登守
梶野土佐守
戸川播磨守
岡本近江守
井上備前守

下ケ札、本文江州湖水縁騷立吟味為御用被差遣候

△ もの共者此程帰府仕候得共、いまた定式ハ通切居、右御用之方相懸取調候儀二御座候、

寅年
公事吟味物濟方訳書

一、評定物七百

内 五百九
百九拾一
残 濟

一、評議物百九拾六

内 百七拾七
拾 九
残 濟

一、一座懸物貳

内 壹
壹
残 濟

一、惣寄合物五拾六

内 四拾貳
拾 四
残 濟

一、内寄合物四百七拾四

内 三百貳拾
百五拾四
残 濟

一、道中方物貳百拾

内 百五拾三
五拾七
残 濟

一、御代官伺物百貳拾四

内 百五拾三
五拾七
残 濟

惣数合千七百六拾貳

内 千貳百七拾六
四百八拾六
残 濟

但、前金七分貳厘四毛余
右之通御座候、以上、

卯二月

4

〔朱書〕

「卯四月九日廻し濟、同十一日名代山口金弥江申渡、」

御相談書

評定所書役

清七
同当分出役

上山新太郎

右新太郎儀、久々病氣ニ罷在今以同篇ニ而急速出勤も難相成、御用多之
場所押張難相勤旨を以出役 御免之儀清七相願相糺候処、相違も無之候
二付、願之通出役差免可申哉与存候、依之及御相談候、以上、
卯四月

5

〔朱書〕

「卯五月廿八日

越前守殿江御直能登守立佐宇立合上ル、同月晦日御書取并承付二御下、
評定所留役并同助之儀申上候書付

御勘定奉行

支配勘定

評定所留役助

池野貞一郎

卯三拾五歳

高百俵五人扶持

内七拾俵五人扶持

本高
御足高

外御用扶持拾人扶持

文政十亥年四月御徒江被 召抱、同十二年七月屋代太郎編集書籍手

伝出役被 仰付、天保八酉年八月支配勘定出役被 仰付、同十二年

十二月支配勘定評定所留役当分助被 仰付、同十三年六月評定所留

役助被 仰付、当卯年迄御奉公都合拾七ヶ年相勤申候、

内当勤三ヶ年

御勘定

三橋貫之進

卯四拾六歳

高百八拾俵

文政十一年七月養父藤十郎跡式被下置、同十二年十二月御徒目付

被 仰付、同十三年六月御勘定評定所留役当分助被 仰付、当卯年

迄御奉公都合拾五ヶ年相勤申候、

内当勤式ヶ年

右貞一郎・貫之進儀、御奉公無懈怠出精仕、貞一郎ハ追々御用向も勤馴、

貫之進も御用立候もの二付、貞一郎者沼田久左衛門明跡評定所留役被

仰付、並之通御足高并御役扶持式拾人扶持被下置、貫之進者右貞一郎跡

評定所留役助被 仰付、是又並之通御用扶持拾人扶持被下置候様仕度奉

願候、以上、

卯五月

跡部能登守

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

6

〔朱書〕

「卯六月 日

越前守殿江御直能登守上ル」

関東在々為取締廻村為致候御代官手代身分 御取立之儀奉願候書付

御代官

関保右衛門手代

中山誠一郎

卯三拾九歳

天保八酉年九月羽倉外記御代官之節、同人役所書役江手銀二而召抱、

同年十二月手代江取立、同十三年三月関保右衛門手代罷成、関東在々

為取締廻村之儀申渡、当卯年迄手代奉公六ヶ年内出役式ヶ年相勤申候、

右誠一郎儀、関東在々為取締廻村為致候処、厚差はまり出精相勤、殊一

体之人物至極貞実ニ而差働有之、召捕もの其外風聞糺等申渡候節も格段

骨折御用立候もの二付、右出役共之内平日重立相勤候様申渡置候儀ニ而、

一体取締出役共之儀、近年迄ハ事馴相勤候もの共も有之趣之処、先達而

野州合戦場宿一件之節、多人数一同御仕置被 仰付、一時二引代り其上

去寅年中迄相勤候もの共之内ニも相当不仕人物者夫々引替、当時之もの

共ハいづれも精勤御用立候儀ニ候得共、何分新役多ニ罷成、御用弁之処

如何可有之哉与深心配仕候処、誠一郎儀右等之懸引申談等も万端行届、

殊追々御改革被 仰出候ニ付而者、関東筋取締方并風俗教諭筋等之儀、

品々世話仕、隠売女・渡世之もの又ハ在々酒屋・髪結床・酒食商等いた

し候類差止方并諸色元方直下ケ或者米穀金銀融通向等之儀も夫々申渡為取計、右者関内一般手広之儀二而一ト通ならざる筋二候処、厚差はまり相勤、追々御趣意之趣在方末々迫行届候趣有之、其上日光

御參詣御時節、以前無宿悪党共横行いたし候由ハ相聞御沙汰之次第も有之候二付、召捕方等之儀申渡候節も別段出精仕、多人数召捕差出夫々御仕置被 仰付、又者改心帰農之ものも不少場広之国々追々穩ニ相成候段、畢竟出役之もの共一同格別骨折別而誠一郎等差はまり精勤いたし候故之儀二而、猶此上奢侈之家作改方等之儀二付、御触之趣者勿論其余勸農教諭筋等品々申含置実以多端之御用筋差湊候処、聊不相屈弥粉骨仕、屢存寄等をも申出潔く精勤罷在一廉御用立候ものニ御座候間、此上末永く出役為相勤度、就而者御時節柄殊御取立之儀者不容易筋ニ御座候得共、廻村出役之もの共者勿論其外御代官手附手代共一統之励ニも罷成候儀ニ付、何卒出格之御評議を以御普請役格江御抱入被 仰付、高式拾俵式人扶持被下置是迄之通御代官手附二而関東在々為取締廻村為致候様仕度、此段偏ニ奉願候、

〔朱書〕

「本文誠一郎儀いまた手代奉公年数ハ無御座候得共、羽倉外記方江抱入不相成以前元御代官大原四郎右衛門元メ手代鈴木直吉養子ニ罷成候内、元御代官平岡彦兵衛手代相勤前後七ヶ年精勤いたし候処、病氣ニ付差免相願其後熟談之上直吉方離縁実方江差戻相成候儀二而、右故一体之勤年数者相応ニ有之、勤向之儀も万端巧者ニ取廻し御用弁宜敷、尤取締出役之儀者駈走又ハ無宿悪党共等召捕候節者至而危急之場合も間々有之、御代官手附手代共之内御用立候ものも右出役不相願候二付、人撰之上取人ニ申付候而も兎角病氣等申立差免相願候儀も有之候間、格別ニ引立不申候而者弥相願候もの無之様罷成、往々御用弁永続之所深懸念心配仕候儀二而、実々無抛意味も御座候

間、右等之次第をも厚御差含被成下、尤関東在々為取締廻村為致候御代官手代共今新規御普請役格江御抱入被 仰付候儀者是迄例も有之候儀ニ付、何卒格別之訳を以申上候通被 仰付候様幾重ニも奉願候儀ニ御座候、」

以上、

卯六月

跡部能登守
梶野土佐守
戸川播磨守
井上備前守

7

〔朱書〕

「卯六月五日廻し済、同七日申渡」

御相談書

評定所書役

円藏粹
川名八郎

右者此度評定所書役当分出役清七悴上山新太郎病氣ニ付出役御免申渡候ニ付、先格之通右跡当分出役八郎江申渡、新太郎江相渡来候御手当一ヶ月金式分ツ、評定所御入用別廉ニ御金蔵江納置候金子之内より相渡候様可致哉与存候、依之及御相談候、以上、

卯六月

8

〔朱書〕

「卯六月 日

越前守殿江御直能登守上ル」

評定所出役

論所地改御代官手附之儀ニ付申上候書付

御勘定奉行

御普請改〔貼紙〕「元ノ格」

評定所定出役

論所地改御代官手附

福井柳右衛門

〔貼紙〕

「高五拾俵三人扶持

内三拾俵式人扶持御足高本高」

〔貼紙〕「辰六拾貳歳」

文政三辰年十一月父伴右衛門持格を以御代官杉庄兵衛手附当分出役申渡、同十亥年八月林金五郎手附当分出役申渡、天保元寅年正月伊奈半

左衛門手附当分出役申渡、同十二年十二月父伴右衛門病氣ニ付願之

通御暇被下候明跡江御抱入被 仰付半左衛門手附に成、同十三寅年四

月出精相勤候ニ付御普請役格被 仰付、同年六月論所地改御代官手附

申渡、〔貼紙〕「同十四卯年九月御普請役元ノ格被 仰付、」都合御

奉公三拾八ヶ年内定出役〔貼紙〕「拾五ヶ年」相勤申候、

右柳右衛門儀年来御奉公無懈怠出精相勤一体貞実ニ而差働有之格別御用

立候ものニ御座候、然ル処〔貼紙〕「天保十三」寅年中年古相勤候論所

地改御代官手附手代共儀、転役・病氣又ハ不屈之筋有之、鳥居甲斐〔貼

紙〕「懸」ニ而吟味之上多人数一同御仕置被 仰付、相残候者、つれも

近来又ハ昨今出役申渡候もの共ニ而必至与御用弁差支候ニ付、御代官手

附手代共之内地方功者之もの再応人撰之上柳右衛門其外江定出役又者当

分出役等申渡候処、御普請役元ノ格ニ而筆頭ニ相勤居候小野貞左衛門儀

〔貼紙〕「も右寅年中」病死仕〔貼紙〕「間も」時、柳右衛門筆頭〔貼

紙〕「ニ相成」候処、一体勤向功者ニ而、地方之儀委敷相心得居、右体

一時ニ引代り候もの共江之申談等行届、取締筋をも厚差はまり相勤、〔貼

紙〕「夫」迄仕来之儀も不宜儀者夫々改革いたし仲間一同之氣受も宜、

殊近来地改其外五街道宿助郷村柄糺等相高別而御用多之処、唯今迄之人

数方も相減候而御入弁差支不相成様精々骨折、元来右体一時ニ引代り候

儀も地改之もの起立以来見合も無之程之儀ニ而私共一同深心配仕候処、

前書申上候通同人格別之人物故万端行届候儀ニ有之、尤地改向之義者い

また間合も無之儀ニ候得共、一体地方勤筋年来苦辛いたし事馴罷在候に

付、末永評定所定出役為相勤度、就而者右体之もの外昨今之もの同様ニ

差置候而者是迄御代官役所ニおゐて重立相勤候詮無之、却而勤場所相替

り候丈新規ニ相成候姿ニ而事実難儀之趣意ニ有之、自然人望ニ拘間敷与

も難申惣体之励をも失候儀ニ付、何卒出格之御儀を以支配勘定格被 仰

付、七拾俵三人扶持高ニ御足高被下御代官手附ニ而是迄之通評定所定出

役為相勤候様仕度奉存候、左候得者年来之勤功も相立此上御用弁取締之

ためニも相成、外出役之もの共者勿論一統之励ニも相成候儀ニ付、厚御

評議之程幾重ニも奉願候、

〔朱書〕

「本文奉願候儀是迄御普請役格之ものハ同元ノ格被 仰付、元ノ格之も

の支配勘定格被 仰付候儀ニ而、御普請役格より直ニ支配勘定格被

仰付候儀ハ差当先例も無御座候へ共、今般之儀者本文ニも申上候通地

改之もの共一時之变革ニ而既御代官役所相勤候もの共多人数ニ者候得

共、勤年数相応之場合ニ至候ものハ定出役不相願候故、無余儀人撰之

上取人ニ申付、内意迷惑之意味も有之候処、厚差はまり精勤いたし候

義ニ付、尋常之取計ニ而ハ一体之氣廻引立不申往々御用弁ニも可相拘

儀ニ付、今般之義者おのつから人望も相帰し候様仕度旁以本文之通奉

願候儀に付、右等之次第をも厚御差含被成下候様仕度奉願候儀ニ御座

候」

以上、

跡部能登守

梶野土佐守

卯六月

9

〔朱書〕

〔卯六月 日〕

備中守殿江〔堀田正篤、老中〕

を以播磨守上ル、同十二日御同人立田禄助を以承付

候様御渡

評定所書役当分出役之儀申上候書付

御勘定奉行

評定所書役当分出役之内御先手同心森辺八儀先達而同所書役被 仰付、

小普請組戸川因幡守組鈴木権十郎儀者此度

御所勘使買物使兼被 仰付、当分出役兩人相減申候、然ル処御赦御用者

勿論遠国并江戸御用口々有之、馬喰町御貸附懸り其外退切相勤候もの多

一体御用多之御場所定式勤之方手足不申候間、右減之分書役当分出役兩

人被 仰付、是迄之通老人江一ヶ月金式分ツ、關所金之内を以御手当被

下候様仕度奉存候、尤伺之通被仰渡候ハ、手跡達者之者相撰名前申上候

様可仕候、此段奉伺候、以上、

卯六月

跡部能登守

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

戸川播磨守
井上備前守

伺之通可被相心得候事、

10

〔朱書〕

〔卯二月廿日〕

越前守殿江田中休蔵を以播磨守上ル

評定所書役当分出役之儀二付申上候書付

御勘定奉行

評定所書役当分出役兩人伺之通被仰渡候二付、則手跡達者二仕候もの相

撰差支有無頭々江及懸合、差支無御座候分別紙名前書差上申候、出役之

儀夫々被仰渡候様仕度奉存候、以上、

卯六月

跡部能登守

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

名前書

御先手

野田甲斐守組同心

小林鐔五郎

三枝宗四郎組同心
小林徳蔵

11

〔朱書〕

〔卯七月廿一日〕

備中守殿御直播磨守上ル

覚

〔卯二月十二日〕

備中守殿立田禄助を以承付候様御渡

覚

書面之通申上三宅立太郎江留役当分助可申渡哉
与存候、依之及御相談候、以上、

卯七月

能登守

播磨守

土佐守殿

備前守殿

評定所留役当分助申渡候儀申上候書付

御届

御勘定奉行

支配勘定見習

三宅立太郎

右者御勘定評定所留役関源之進儀新渴奉行支配組頭被

仰付候明跡留役

当分助申渡候、依之御届申上置候、以上、

卯七月

跡部能登守

遠国御用罷越候

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

12

〔朱書〕

〔卯八月十四日

〔真田幸實、老中〕
信濃守殿江

能登守上ル

評定所書役

新井清太夫儀二付申上候書付

跡部能登守

戸川播磨守

評定所書役

新井清太夫

卯五拾八歳

外勤金拾両

右清太夫儀去寅八月廿九日

一位様御広敷御用部屋伊賀格吟味役評定所書役被

仰付、当分過人二

いたし置追而明有之候ハ、減切ニ可仕旨被仰渡出精罷在候得共、手跡不

達者ニ而御用多之場所間ニ合兼一体書役共儀者日々多分之認物をも為引

受候故、格別手跡達者之ものニ無御座候而ハ御用弁差支候ニ付、明有之

候節者再心人撰之上取人ニ申上来、是迄右体之もの過人被 仰付候儀無

御座自然惣体之励ニも相拘候間、清太夫儀此節相応之向江御場所被 仰

付候様仕度奉存候、依之此段申上候、以上、

卯八月

跡部能登守

戸川播磨守

13

〔朱書〕

〔卯八月廿二日、

信濃守殿御直能登守上ル

評定所留役助之儀申上候書付

御勘定奉行

〔一〕
佐々木近江守

支配勘定

青山伴右衛門

高百俵式人扶持

内三拾俵式人扶持
御足高

卯五拾貳歳

右伴右衛門儀、御奉公出精相勤差働も有之候ものニ御座候間、去寅八月評定所留役当分助申渡置候処、弥出精相勤候ニ付此度水野正太夫懸り替申渡候明跡評定所留役助被仰付、並之通御用扶持拾人扶持被下置候様仕度奉願候、以上、

卯八月

遠国御用罷越候

跡部能登守
(忠頼、勘定奉行)

鳥居甲斐守

梶野土佐守

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

佐々木近江守

14

〔朱書〕

〔卯八月廿八日

信濃守殿江

能登守上ル

書面之通申上屋代増之助江留役当分助可申渡哉与存候、依之及御相談候、以上、

卯八月

能登守

播磨守

土佐守殿

備前守殿

近江守殿

評定所留役当分助申渡候儀申上候書付

御届

御勘定奉行

佐々木近江守

支配勘定

屋代増之助

右評定所留役当分助明御座候ニ付、右明跡当分助申渡候、依之御届申上置候、以上、

卯八月

跡部能登守

遠国御用罷越候

鳥居甲斐守

右同断

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

佐々木近江守

15

〔朱書〕

〔卯九月二日

越前守殿御直能登守上ル、同四日伺之通承付候様御書取御添、田中休藏を以御渡

書面伺之通可申渡旨被仰渡承知仕候、

卯九月四日

御勘定奉行

佐々木近江守

評定所留役助 御免之儀申上候書付

御勘定奉行

佐々木近江守

御勘定

評定所留役助

高百五拾俵

林 伊太郎
卯三拾八歳

内式拾俵式人扶持 本高
百式拾俵 御足高

外御用扶持拾人扶持

右伊太郎儀去寅六月評定所留役助被 仰付、御奉公無懈怠出精相勤候得

共、留役之勤向二者相当仕兼候間、留役助

御免之上外懸為相勤候様仕度奉存候、依之申上候、以上、

卯九月

跡部能登守

遠国御用罷越候

鳥居甲斐守

右同断

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

佐々木近江守

16

〔朱書〕

〔卯九月五日

信濃守殿江御直能登守上ル〕

評定所書役当分出役之儀ニ付申上候書付

御勘定奉行

佐々木近江守

評定所書役当分出役五人願之通被仰渡候ニ付、則手跡達書ニ仕候もの相
撰差支有無頭々江懸合、差支無御座候分別紙名前書差上申候、出役之儀
夫々被仰渡候様仕度奉存候、以上、

卯十月

跡部能登守

鳥居甲斐守

名前書

梶野土佐守

戸川播磨守

石河土佐守

佐々木近江守

大御番頭

小笠原豊後守同心

小普請方御門番
飯嶋三介

御先手

大嶋丹波守組同心

高橋渡世平

遠山近江守組同心

西丸御先手

鈴木吉之助

西丸御賄六尺方

玉嶋善五郎

17

〔朱書〕

〔卯九月七日

越前守殿御直播磨守上ル、同十四日御同人御直承付候様御書取御添
能登守江御渡〕

評定所留役助之儀申上候書付

御勘定奉行

佐々木近江守

高百五拾俵
内式振儀式人扶持 本高
御足高
御勘定 赤木唯五郎
卯三拾七歳

右唯五郎儀、御奉公無懈怠出精相勤差働も有之候ものニ御座候間、去寅十月評定所留役当分助申渡置候処、弥出精相勤候二付、此度林伊太郎留役助 御免被 仰付候明跡評定所留役助被 仰付、並之通御用扶持拾人扶持被下置候様仕度奉願候、以上、

卯九月

跡部能登守

遠国御用罷越候

鳥居甲斐守

右同断

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

佐々木近江守

〔朱書〕

〔卯九月九日廻し濟播磨守殿御渡、同 日於評定所名代〕

評定所書役当分出役婦番申渡候儀申上候書付

御届

御勘定奉行

佐々木近江守

評定所同心の

同所書役当分出役

斎藤啓之進

右啓之進儀、文政十亥年四月紅葉山

御靈屋附御掃除之者相勤候節、評定所書役当分出役被 仰付、天保三辰年十一月同所同心被 仰付候上引統右出役申渡置候処、当春中より痢症相煩此節別而相募日勤之御場所難相勤候間、出役 御免婦番仕度旨相願候二付、病体相糺候処無相違急速全快可仕体無之候間、啓之進願之通出

役差免婦番申渡候、依之申上候、以上、

卯九月

跡部能登守

鳥居甲斐守

梶野土佐守

戸川播磨守

井上備前守

佐々木近江守

18

〔朱書〕

〔卯閏九月十五日

〔上井利位老中〕
大炊頭殿江新阿弥を以能登守上ル〕

評定所書役当分出役之儀申上候書付

書面之通可申上与存候、依之及御相談候、

卯閏九月

御勘定奉行
佐々木近江守

評定所書役当分出役之内大御番同心中嶋東三郎・御持組同心若菜三男三郎兩人者先達而新瀉奉行支配定役被 仰付、評定所同心斎藤啓之進・小普請組大八木和十郎兩人者病氣二付出役 御免ニ相成、小普請組市川林太郎者此度評定所書役被 仰付、追々当分出役五人相減申候、然ル処御敕御用者勿論遠国并江戸御用口々有之、馬喰町御貸附懸り其外追切相勤候もの多く、一体御用多之御場所右体多人数相減候而者定式勤之方手足り不申差支候間、右減之分書役当分出役五人被 仰付、是迄之通壹ヶ月金式分ツ、闕所金之内を以御手当被下候様仕度奉存候、尤伺之通被仰渡候ハ、手跡達者之もの相撰名前申上候様可仕候、此段奉候候、以上、

卯閏九月

跡部能登守

鳥居甲斐守

遠国御用罷越候 梶野土佐守

戸川播磨守

佐々木近江守

〔朱書〕

〔卯九月十五日

越前守殿江林阿弥を以播磨守上ル〕

書面之通申上、吉際繁三郎江留役当分助可申渡哉与
存候、依之及御相談候、以上、

卯九月

能登守

播磨守

甲斐守殿

土佐守殿

備前守殿

近江守殿

評定所留役当分助申渡候儀申上候書付

御届

御勘定奉行
佐々木近江守

支配勘定

吉際繁三郎

右者評定所留役当分助明有之候二付、右明跡当分助申渡候、依之御届申

上置候、以上、

卯九月

跡部能登守

鳥居甲斐守

梶野土佐守

19

〔朱書〕

〔卯九月十七日

越前守殿江御直播磨守上ル、同月廿日御同人御直承付候様御書取御添
能登守江御渡、即日返上〕

評定所留役助之儀申上候書付

書面伺之通可申渡旨被仰渡奉承知候、

卯九月廿日

御勘定奉行
佐々木近江守

支配勘定

山下敬次郎

卯三拾四歳

高百俵式人扶持

内拾五俵式人扶持
御足高

右敬次郎儀、御奉公無懈怠出精相勤差働も有之候もの二御座候間、去寅
十二月評定所留役当分助申渡置候処弥出精相勤候二付、此度川上謙三郎
表御右筆被 仰付候明跡評定所留役助被 仰付、並之通御用扶持拾人扶
持被下置候様仕度奉願候、以上、

卯九月

跡部能登守
鳥居甲斐守

遠国御用罷越候

梶野土佐守
戸川播磨守

井上備前守

〔朱書〕

〔卯九月廿二日

越前守殿江田中休藏を以播磨守上ル、同廿三日御同人同人を以承付候様御渡、同廿二日承付いたし御同人江同人を以返上〕

評定所使之者

矢吹庄三郎儀ニ付申上候書付

書面申上候通可仕旨被仰渡奉承知候、

卯九月廿三日

御勘定奉行
佐々木近江守

佐々木近江守

高八俵老人扶持

評定所使之者

矢吹庄三郎

卯三拾六歳

右庄三郎儀、去寅年三月浅草御蔵番より評定所使之者過人被 仰付候処、心障も有之候ものニ御座候間、御暇被 仰付候様仕度奉存候、依之申上候、以上、

卯九月

跡部能登守
鳥居甲斐守
梶野土佐守
戸川播磨守
井上備前守
佐々木近江守

〔朱書〕

〔卯九月廿九日

越前守殿江新阿弥を以播磨守上ル、同閏九月十四日大炊頭殿啓阿弥を以御書付御渡〕

評定所書役明跡之儀申上候書付

御勘定奉行

佐々木近江守

高式拾石式人扶持

小普請組

津田美濃守組

評定所書役

市川禄太郎

卯四拾四歳

文化十三年十二月養父熊吉跡式被下置小普請二入、文政十一年十月評定所書役当分出役被 仰付候、

右禄太郎儀、常々御奉公出精相勤差働も御座候ものニ付、此度平田与左衛門新渴奉行支配広間役被 仰付候明跡江上下持格評定所書役被 仰付、並之通御足高御役金被下置候様仕度奉願候、尤津田美濃守江申談候上申上候、以上、

卯九月

跡部能登守
鳥居甲斐守
梶野土佐守
戸川播磨守
井上備前守
佐々木近江守

〔朱書〕

〔卯十月十二日

信濃守殿江御直能登守播磨守立合被達〕

評定所留役并同助之儀申上候書付

御勘定奉行

支配勘定

評定所留役助

小俣稻太郎

卯三拾四歳

高百俵三人扶持

内三拾俵三人扶持

御足高

外御用扶持拾人扶持

天保元寅年十月父倍一郎跡式被下置小普請に入、同九戌年八月御触書

認方御用出役被 仰付、同十一子年十二月支配勘定出役被 仰付、同

十三寅年五月支配勘定留役当分助被 仰付、同年十二月評定所留役助

被 仰付、出役共都合六ヶ年相勤申候、

内当勤式ヶ年

御勘定

評定所留役助

三橋貫之進

卯四拾六歳

高百八拾俵

外御用扶持拾人扶持

文政十一子年七月養父藤十郎跡式被下置小普請二入、同十二丑年十二

月御徒目付被 仰付、天保十三寅年六月御勘定評定所留役当分助被

仰付、当卯六月評定所留役助被 仰付、都合拾五ヶ年相勤申候、

内当勤式ヶ年

御勘定

星野金吾

高百五拾俵

内三拾俵式人扶持 本高

御足高

卯三拾五歳

天保八酉年三月養父仁十郎跡式被下置小普請二入、同年五月学問所勤

学被 仰付、同十二丑年十一月御徒目付被 仰付、同十四卯年七月御

勘定評定所留役当分助被 仰付、都合七ヶ年相勤申候、

内当勤壹ヶ年

支配勘定

三宅弥作実子惣領

支配勘定見習

三宅立太郎

卯三拾五歳

拾人扶持

父本高七拾俵五人扶持

天保五午年十一月從部屋住学問所出役被 仰付、同八酉年七月支配勘

定見習被 仰付、当卯七月評定所留役当分助申渡、出役共都合拾ヶ年

相勤申候、

内当勤壹ヶ年

右稻太郎・貫之進・金吾・立太郎儀、御奉公無懈怠出精仕、稻太郎・貫

之進者御用向も勤馴、金吾・立太郎も御用立候もの二付、稻太郎・貫之

進者先達而戸田嘉十郎寺社奉行吟味物調役・関源之進新湯奉行支配組頭

被 仰付候明跡評定所留役被 仰付、並之通稻太郎者御足高并御役扶持、

貫之進者御役扶持計執も式拾人扶持宛被下置、金吾・立太郎ハ右稻太

郎・貫之進跡評定所留役助被 仰付、是又並之通御用扶持拾人扶持ツ、

被下置候様仕度奉願候、以上、

卯十月

跡部能登守

鳥居甲斐守

戸川播磨守

(政平勘定奉行)

石河山城守

(忠義勘定奉行)

榊原主計頭

〔朱書〕

〔卯十月廿日〕

信濃守殿江御直能登守上ル

評定所書役明跡之儀申上候書付

十一月

土佐守
能登守

播磨守殿
主計頭殿

御勘定奉行

評定所留役 御免相願候儀申上候書付

西丸御先手

玉井藤右衛門組同心

評定所書役当分出役

田中半助

卯四拾九歳

御勘定奉行

御勘定

評定所留役

岡部嘉平次

卯三拾九歳

高三拾俵式人扶持

文政元寅年正月西丸御先手同心江御抱入二相成、同十一子年十月評定

所書役当分出役被 仰付候、

内^{百俵三人扶持} 本高

外御役扶持式拾人扶持

右半助儀、常々御奉公出精相勤差働も御座候もの二付、此度宮崎甚助小

普請入被 仰付候明跡評定所書役被 仰付、並之通勤金被下置候様仕度

奉願候、尤玉井藤右衛門江も申談候上申上候、以上、

卯十月

跡部能登守

戸川播磨守

石河山城守

榊原主計頭

通留役 御免之上外懸り為相勤候様仕度奉存候、依之申上候、以上、

卯十一月

跡部能登守

戸川播磨守

石河土佐守

榊原主計頭

評定所留役御勘定組頭

松井助左衛門御褒美之儀二付別段申上候書付

御勘定奉行

評定所留役御勘定組頭江每暮金式枚宛被下置候御褒美之儀、外組頭与違
老入勤二而遠国御用其外御手当等被下候、諸懸御用等も無御座、其上御

〔朱書〕

〔卯十一月廿日〕

〔阿部正弘、老中(石河政平、勘定奉行)
伊勢守殿江土佐守上ル〕

書面之通申上願之通留役 御免元懸相勤候様

可申渡哉与存候、依之及御相談候、以上、

用向者却而繁劇二而評定所江日々罷出候儀者勿論、時々之早出居残夜二入引取候儀も度々有之婦宅之上も調物仕、自然諸失脚も多く内実差支之趣等追々御歎申上、羽田藤右衛門組頭之節分被下置候儀二而、尤同人者寛政十二申年八月組頭被 仰付、同年者金壹枚、翌年より金式枚宛被下置、秋月勇之進ハ藤右衛門御勘定吟味役二而申合相勤追而勇之進壹人勤二相成候後、最初者金壹枚被下置候二付、其後前書之意味御歎申上、每暮金式枚宛被下置、中野又兵衛儀、勇之進吟味役二而申合相勤追而又兵衛壹人勤二相成候後者最初より金式枚宛被下置豊田藤之進も又兵衛吟味役二而申合相勤追而藤之進壹人勤相成候後、最初分金式枚宛被下置、大熊善太郎者去ル亥年十月組頭被 仰付候処、同年者御褒美之儀不申上候二付、翌年より金式枚宛被下置、佐々木循輔儀者去寅四月組頭被 仰付、同暮金式枚被下置候儀二而此度申上、松井助左衛門儀当閏九月循輔軼役跡被 仰付、最初分壹人二而相勤評定所之儀ハ諸般引受別而御用多之折柄格別骨折候儀二付、前書藤右衛門節之通当年之儀者金壹枚被下置、来辰年より同人以来勇之進・又兵衛・藤之進壹人勤相成以後并善太郎・循輔江最初より被下置候御振合を以助左衛門江も每暮金式枚宛御褒美被下置候様仕度、此段猶別紙を以奉願候、以上、

卯十一月

跡部能登守

戸川播磨守

石河土佐守

榊原主計頭

評定所留役御勘定組頭御褒美之儀申上候書付

御勘定奉行

評定所留役御勘定組頭松井助左衛門儀、当閏九月当役被 仰付、右組頭之儀者格別御用多之御場所壹人二而骨折相勤候二付、每暮金式枚宛被下

置候儀二而殊一昨年来者諸事御改革等二而猶更繁劇仕、其上留役共御人少新役多二而万端手込組頭手調物茂多分二候処、全壹人にて昼夜骨折御用弁宜敷格別出精相勤候二付、是迄も組頭壹人勤之節每暮被下置候御振合を以、当年分御褒美被下置候様仕度此段奉願候、以上、

卯十一月

跡部能登守

戸川播磨守

石河土佐守

榊原主計頭

25

〔朱書〕

〔弘化元年〕

〔辰三月廿二日松平和泉守今土佐守受取承附いたし、翌廿三日大炊頭殿江立田録助を以土佐守返達〕

支配調役当分助之儀二付申上候書付

書面伺之通寺社奉行江被仰渡候旨奉承知候、

レ 辰三月廿三日

書面伺之通相心得、御勘定奉行江申談候様被仰聞承知

仕候、

辰三月廿二日

寺社奉行

信州戸隠山之同国飯繩山之論所見分吟味与して支配調役豊嶋五十助・井上新右衛門儀、彼地江被差遣候旨松平和泉守伺之上申渡候、一体支配調役之儀、兼而申上候通至而御用多之処、御人少之儀遠国御用被 仰付候節者何レも其度々評定所留役共之内分当分助被 仰付候儀二御座候間、当分助壹人被 仰付候様仕度奉存候、依之此段相同申候、

〔朱書〕

「一、支配調役四人二而之節、兩人遠国御用被 仰付候得者助之もの兩人二相成候、度々之先例二而忝人罷出之節も小田切庄三郎御用中 迄者兩人ツ、相願候事故、今般者何れ兩人助之者可相願処、昨年 中別而御用向も抄取且公事方御勘定奉行内談之趣無余儀筋も有之 候間、別体を以此度限本文之通兩人遠国御用中忝人助申上候儀ニ 御座候間、以後之例二者不相成候様仕度奉存候、」

辰三月

26

〔朱書〕

「辰三月十七日内藤紀伊守（信親、寺社奉行）之差越、同廿五日池野貞一郎江当分助申渡候 上挨拶返却」

〔御勘定奉行衆

寺社奉行

信州戸隠山与同国飯繩山論所見分吟味御用与して支配調役兩人彼地江被 差遣候二付、是迄兩人遠国御用之節ハ助兩人申上候仕来二候得共、昨年 中吟味物も格別抄取、殊二兼而御内談之趣も無御極筋故、此度限之詛を 以当分助忝人申上候積、右者以後之例二者不相成様御心得有之度、且御 差支も無之候ハ、兼而御掛合濟之者を御差越有之候様いたし度此段及御 相談候事、

辰三月

御書面之趣承知仕、今廿五日池野貞一郎江御支配調役当分助申渡候、 此段御挨拶旁御達仕候、以上、

三月廿五日

石河土佐守

〔朱書〕

「辰三月廿五日評定所ニおゐて土佐守申渡」

申渡

右者寺社奉行吟味物調役当分助可被相勤候、

辰三月

御勘定

評定所留役

池野貞一郎

27

〔朱書〕

辰八月七日

越前守殿原弥十郎を以承付候様能登守江御渡、 翌八日承付いたし同人を以能登守返上」

寺社奉行

書面評定所留役池野貞一郎儀、寺社奉行吟味 物調役当分助 御免可申渡旨被仰渡奉承知候、

辰八月八日

御勘定奉行

評定所留役池野貞一郎支配調役助 御免之儀申上候書付

寺社奉行

評定所留役

池野貞一郎

右信州戸隠山与同国飯繩山一件論所見分吟味支配調役豊藤五十助・井 上新右衛門被差遣候二付、右御用相濟候迄支配調役助被 仰付候、然ル 処五十助・新右衛門婦府仕飯繩山一件い、また落着二者相成不申候得共、 評定所留役御人少此節御用多之趣ニも相聞、私共方差支之筋無御座候間、

助役 御免之儀御勘定奉行江被仰渡候様奉存候、依之申上候、
八月

高百俵式人扶持
内^{本高}三拾俵式人扶持
御足高
外御用扶持拾人扶持
青山伴右衛門
辰五十四歳

〔朱書〕

〔辰八月八日於

御殿佑代佐藤清五郎江能登守申渡〕

御勘定

評定所留役

池野貞一郎

右寺社奉行吟味物調役当分助 御免可被 申渡候事

寺社奉行衆

御勘定奉行

御勘定奉行江引合之心覚

池野貞一郎儀支配調役助之儀最早拙者共方ニ而差支無之候間、助役

御免之儀各方江御達有之候様申上候書面今日大炊頭殿今進達いたし候
旨、御勘定奉行江口書ニ而可引合事、

御書面池野貞一郎儀調役当分助

御免可申渡旨、大炊頭殿御書取を以被仰渡候ニ付、其段今八日貞一郎
名代之もの江申渡候、依之御挨拶旁御達仕候、以上、

辰八月

御勘定奉行

28

〔朱書〕

〔辰六月廿一日伊勢守殿江能登守上ル〕

評定所留役并同助之儀申上候書付

御勘定奉行

支配勘定

評定所留役助

文化十四年閏十一月評定所書役江御抱入ニ相成、天保十三寅年二月支配
勘定格被 仰付、同年八月支配勘定評定所留役当分助被 仰付、同十四
卯年八月評定所留役助被 仰付、御奉公都合三拾式ケ年相勤申候、
内当勤三ケ年

支配勘定

評定所留役当分助

屋代増之助

辰三十八歳

高百俵老人半扶持

内^{本高}拾五俵老人半扶持
御足高

文政十二丑年七月養父家督被下置、直ニ 御台様御広敷添当被 仰付、
天保十四卯年五月支配勘定被 仰付、同八月評定所留役当分助被 仰付、
御奉公都合拾六ケ年相勤申候、

内当勤式ケ年

右伴右衛門・増之助儀御奉公無懈怠出精仕、伴右衛門者御用向も勤馴、
増之助も御用立候ものニ付、伴右衛門者昨年日下部七之助御藏奉行被
仰付候明跡評定所留役被 仰付、並之通御足高并御役扶持式拾人扶持被
下置、増之助者右伴右衛門跡評定所留役助被 仰付、是又並之通御用扶
持拾人扶持被下置候様仕度奉願候、以上、

辰六月

跡部能登守

戸川播磨守

石河土佐守

榊原主計頭

評定所書物御用出役

河原興一郎儀二付奉願候書付

跡部能登守

石河土佐守

高七拾俵五人扶持

遠山彦八郎組西丸御徒
評定所書物御用出役

河原興一郎
辰四十三歳

右興一郎儀此度遠山彦八郎組御徒組頭明跡江退役之儀、彦八郎今書上候由申聞候、興一郎儀去ル戌年四月御触書認方御用出役被 仰付、右御用済引統評定所書物御用出役被 仰付候処、御奉公無懈怠格別出精仕一体之人物も宜一廉御用立候ものニ御座候間、出役之もの其外励之ためにも相成候儀二付、何卒彦八郎願之通同人組御徒組頭被 仰付候様仕度、此段於私共も奉願候、以上、

辰五月

跡部能登守

石河土佐守

本史料紹介は、JSPS科学研究費補助金「近代国家模索の歴史的前提」(課題番号17K03094)の助成を受けたものです。